

酒文化研究所

NEWS LETTER

第 102 号 2021 年 6 月 25 日

【プレミアムトーク】

芸者文化の保持に欠かせない外国人

さゆき
紗幸 (深川芸者・社会人類学者)

さまざまな分野できらりと輝くプレミアムな方へのインタビュー「プレミアムトーク」。今回は古くからの花柳界のひとつ東京・深川で置屋を営むオーストラリア出身の女性、紗幸さんを探りあげます。

紗幸さんは高校生の時に交換留学生として来日しました。日本がたいへん気に入りそのまま慶応大学に進学、当時外国人は少なく、慶応大学で初めての白人女性と言われたそうです。卒業後はオックスフォード大学で MBA を取得し、日本で通信社の記者となりますが、オックスフォード大学に戻り社会人類学を学び博士号を取得します。ここで研究対象となる社会に自ら入っていくフィールドワークという研究手法を身につけました。

その後、日本の社会や文化に関心を向けながら、アメリカの高級誌「ナショナルジオグラフィック」でディレクターとして活躍します。日本に関する複数のドキュメンタリー番組に関わった後、外国人が名前は知っていても実態がわからない「芸者」についての番組をつくる企画が持ち上がります。

これがきっかけで芸者をフィールドワークすることになった紗幸さんは、芸者文化を海外に発信しながら深川芸者の育成にも取り組むようになります。古いしきたりが残る世界で、彼女がどのように受け入れられ、何を発信していこうとしているのかをお聞きしました。

【お問い合わせ】 本資料に関するお問い合わせは下記まで。

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 3-3-14CM ビル

株式会社酒文化研究所 <http://www.sakebunka.co.jp/>

TEL03-3865-3010 FAX03-3865-3015

E メール : yamada@sakebunka.co.jp

■ 昔のままの芸者修行

芸者を採りあげる番組の企画を詰めるなかで、社会人類学者としてのキャリアを生かし、紗幸さんが芸者を目指してその過程をドキュメンタリーにするのがおもしろいというアイデアが出ます。花柳界には伝手も何もありませんでしたが、浅草で置屋さんを営む 65 歳のお姐さんが弟子として受け入れてくれることになりました。芸者への第一歩を踏み出した紗幸さんを待っていたのは、予想を超える厳しく難しい世界でした。

受け入れてくれたお姐さんは、それまで一人も芸者の育成をしたことはありませんでした。今思うと浅草は花柳界でも特に封建的で、よく外国人の私を受け入れてくれたと思います。お姐さんが若いころに比べると芸者の数は減る一方でしたから、何か新しいことをしないといけないと思ったのかもしれませんが。たまたまお姐さんが年配格の芸者衆だったこともあり、浅草の花柳界に加わることが認められて芸者修行をはじめたのが 2006 年です。育成方針は自分が入門した 50 年前のやりかたのままでもとても厳しいものでした。



深川芸者としてお座敷に出ながら弟子を育成する一方、
大学で芸者文化の講義も受け持つ紗幸さん

修行に入ってすぐにとんでもない世界に入ってしまったと思いました。お茶と踊りと太鼓をすることが入門のときの条件でしたので、すぐにこのお稽古が始まりました。お稽古代やもろもろで 1 年弱で 500 万円もかかり、それがすべて自己負担です。しかも見習いのうちは副業も禁止でしたから、お座敷にデビューするまでは無収入です。私からするとそれまでのキャリアをほったらかしにしている状態で、フィールドワークとはいえ、いつ芸者として独り立ちできるのか見通せず番組をつくるどころではありませんでした。

■ 大学で芸者文化の先生に

厳しい修行と慣れない環境に四苦八苦していた紗幸さんでしたが、母校の慶応大学で芸者文化を教えるというチャンスが訪れます。

修行を始めてすぐに慶応大学に芸者文化を体験させる提案をすると、「それもよいがあ

なた自身が芸者文化についての授業をおこなったらどうか」というオファーをいただきました。芸者修行とキャリアがうまく結びつくありがたい提案でした。大学からの依頼だったので浅草の花柳界でも認められて、目指す方向が見えてきました。授業は30名くらいの留学生と日本人学生が半々のコースで、授業は4年間、英語でおこないました。

これがオーストラリア政府にも認められて奨学金をいただき、北海道から長崎まで日本各地にある花柳界を調べて回りました。どういう背景をもち、どのように衰退したのか、継続しているところはどのような条件があるのかなど、特に地域の産業との関わりは重要です。この研究をしたことで花柳界の構造を俯瞰的にみることができるようになりました。

全国の芸者の数はおよそ100年前が最大で、その後は減る一方です。深川もかつては多数の花柳界でした。富岡八幡宮・成田不動尊・桜の名所などの観光地を抱えて、大きな地場産業であった材木商の旦那衆に支えられて発展しました。ですが産業構造の変化や貯木場の移転により深川花柳界は衰退してしまい、私が移ってきたときにはお姐さんが数名いるだけの今にも途絶えてしまいそうな状態でした。

そもそも花柳界というのは花（花魁）と柳（芸者）で成り立っていて、もとは芸をするのは男性のほうかん（たいこもちとも呼ばれる）が中心でした。それが今から300年前の深川に三味線の達者な女性芸者が初めて登場します。その後、芸事を中心に活動する女芸者が全国に広がったので、深川は女芸者の発祥の地という歴史があります。花魁はきらびやかに髪飾りをたくさんつけますが、芸者は櫛一本とかんざしを前後にひとつずつだけという習俗も定まりました。

■ 浅草から深川での独立へ

大学の授業で学生たちはお座敷を体験します。教授たちの協力があればこそ実現できたことですが、そのほかにも多くの支援を受けて紗幸さんは芸者として独立します。

大学の授業の一環で学生をお座敷に呼んだ時はみんなにたいへん喜ばれました。参加したはんぎよく（見習いの芸者）さんは、自分より若いお客さんがお座敷に来ることはありませんでしたから、「紗幸さん、今日のお客さんは私たちよりも若いね……」ととても喜んでくれました。年配の芸者衆も多勢の20代のお客様を喜んでくれました。

もちろん学生ではお座敷代をもてませんから、大学のたくさんの先生方に一緒に参加してもらいました。芸者文化の授業をおこなった4年間は、先生方の協力で、毎年、学生にお座敷を体験させられたのは、ほんとうによかったと思います。

そのほかにも多くの方のご支援をいただきました。まだ修行中だったころに、オーストラリアにいる父が癌になり余命半年という宣告を受けました。そこでオーストラリアと日

本を何回も往復するようになったのですが、そのたびにお稽古が中断されて遅れがちになりました。すると鼻屑にしてくれたお客様が邦楽を 1000 曲以上入れたアイポッド (iPod) とスピーカー・楽譜・三味線を用意してくださったのです。おかげで飛行機の中や看護中もお稽古できました。



深川芸者のお姐さんから踊りを習う半玉さん

そうこうして 4 年も経った頃でしたか、お世話になったお姐さんが置屋を引退する話が持ち上がります。私はこの機会に置屋として独立したいと考えましたが、浅草では外国人という理由で独立は認められませんでした。最終的に深川に移り、そこで置屋を始めることになったのです。

■ 深川芸者「紗幸」誕生

紗幸さんは深川に移り置屋を営みながら若い芸者の育成にも取り組みます。京都や金沢では、芸者の育成に自治体がスポンサーとなっていますが、深川ではそうしたサポートはありません。それでも紗幸さんのところには芸者になりたいという相談がたくさん舞い込みます。

慶応大学の次は早稲田大学から講義のオファーをいただき、現在は東洋大学でも週 2 回日本文化と芸者に関する授業をおこなっています。日本各地や海外から依頼もいただき、文化講座やイベントなどで講演することも多いです。新型コロナ流行前の 2019 年は、中東やヨーロッパなど 9 か国に深川芸者として招待されました。ノルウェーでは現地の子供にも着物を着させて私たちの芸を披露し、イタリアのローマの博物館では深川芸者の写真展覧会と講演会をおこなうなど活動内容はさまざまです。

深川芸者として海外イベントに参加し情報発信することが多いからか、最近は留学指向のある日本人や海外から芸者になりたいと応募があります。ですが芸者や置屋は風俗営業法の規制で外国人はビザがとれません。私は日本の永住権をもっているから置屋をやることが認められたのです。

コロナ以前は芸者志望の若い日本人を毎年 3 名ずつ住み込みで預かりました。高校や大学に通いながらお稽古に励んだ子もおり、これまでに世話をした子は 10 名を越えます。芸者になるためには芸事のお稽古、礼儀作法やマナーなどの習得に最低半年はかかります。その育成期間が無収入ではなかなか続けられません。西欧のバレエやオペラの場合には企業スポンサーがついて育成を支援してくれます。芸者は海外からの人気が高いため、観光や文化の面から支援を受けられるとよいと思います。

■ 芸者文化を体験したい外国人たち

深川の花柳界を活性化するために外国人観光客が必要だと紗幸さんは考えます。運河に和舟を浮かべて芸者を乗せたり、個人客が手軽に芸者さんと呼べる店をつくったり、芸者を通じて四季の変化を体験できたりすれば大きな観光資源になると考えるからです。

外国人には日本観光で芸者さん呼びたいというニーズがあります。しかし「予約の取り方がわからない」「個人では料金が高くて頼めない」など課題は満載です。私の置屋では外国人ボランティアにこうした問い合わせに対応してもらっています。日本人のお客さんは先細りですから、外国人観光客の取り込みが大切なのです。

かつて和服は高価で着付けも難しかったので縮小する一方でした。しかし浅草などの観光地で、外国人観光客の着てみたいというニーズに応えるために簡単に着られて洗えるポリエステルに着物が生まれ、日本人観光客にも広がりました。海外からの観光客に対応することは花柳界の大きなテーマです。

そこでお手軽に芸者遊びを経験していただくこと、「舞妓ちゃん一杯」という企画を始めました。1時間1万円で若い見習の舞妓ちゃんを派遣して、カウンターのお店で一緒に飲もうというものです。ここからお座敷につなげたいと思っています。それと深川を舞台にして芸者にスポットを当てた番組もつくってみたいです。「定期的に芸を披露できる舞台」や「お座敷とカウンターのある店」など実現したいことがたくさんあります。協力者を募ってひとつひとつ実現していこうと思います。■

〈深川芸者 紗幸 プロフィール〉

本名フィオナ・グラハム。オーストラリアのメルボルン生まれ。 www.sayuki.net



気軽に芸者遊びを体験できると好評な「舞妓ちゃん一杯」。外国人だけでなく日本人の利用も多い

■ 筆者プロフィール：山田聡昭（やまだとしあき）

株式会社酒文化研究所 第一研究室長。1963年生まれ。1986年武蔵大学卒業。酒類及びその市場と文化に精通し酒類企業をサポートするほか、酒文化に関するレポートを多数執筆。

